**藤沢周平「橋ものがたり」から「小さな橋で」**



**この人の作品では、市井物の「海鳴り」がよかったし、時代物では「蝉しぐれ」に指を屈する。他にもいい作品が多い。若い時に読んだときはそうでもなかったが、今は身に染みる。昔読んだもので、題名は忘れたが、随筆集がよかった。「掛けてよいのは衣桁に小袖、掛けてくれるな深情け」「恋にこがれて泣く蝉よりも鳴かぬ蛍が身を焦がす」といった都都逸をこのとき覚えた。今回は「橋ものがたり」から子供の話。舞台は文京区関口あたり。川は神田川。**

**主人公である10歳の少年広次一家。父民蔵は遠州屋という大店で番頭をしていたが、博奕で店の金を使い込んだ。主人の情けで旅先で稼いで店にお金を返す約束で、広次が6歳の時、音羽3丁目に向かって橋を渡って行った。以来消息はない。一家の主人公を失って一家は大変だった。母親のおまきは飲み屋に務め、毎晩酔って帰ってくる。それでも月々の稼ぎから主人の借金の一部を返している。一人娘のおりょう（16歳）は、松が枝町の米屋に通いで勤めているが、最近妻子持ちの手代重吉とできたらしいのだ。母親のおまきが先行きを心配して、広次に夕方おりょうを迎えに行かせている。**



**「橋ものがたり」**

**藤沢周平著**

**（新潮文庫）**

**それ以外に米をといで夕食の手配をしたり、遊びたい盛りの広次には大変な毎日である。ある日、いつものように姉のおりょうを迎えにゆくと、大変なことが起きてきた。おりょうが朝から店にきていないというのだ。「では重吉さんをお願いします」「あいつはきのう店をやめた」と店員。店の主人は広次を座敷に招き「あんたがおりょうの弟さんか」といい「二人は駆け落ちしたようだ。そのとき、少し店の金を持ち出したが、大目にみるつもりだ」「目が覚めたら帰ってくるだろうよ」。**

**母親のおまきは毎晩酔って帰ってくる。**

**これからというもの、母親は荒れた。毎晩へべれけに酔って帰ってくることが多くなった。広次はそんな母親を見守りながら、近所の子供たちと川の沿岸に生える葦原に居ついている「ヨシキリ」の巣を守っていた。せがむ仲間たちに、自分たちより高い背の葦に作った巣の卵を見せたこともある。あるとき、見知らぬ子供たちがヨシキリの卵を取りに来たので喧嘩になった。あちこち手負いの傷を負ったが、相手に勝った。広次はそれ以来、手分けしてヨシキリの巣を暇があると見張っていた。**



**そんなある時だ。一人の男が逃げてきて広次の目の前で葦の茂みに隠れた。ついで刃物をきらめかせた3人の男が「おい坊や、今人を見かけなかったか」「いいえ」と本能的に否定してしまった。間もなく男が姿を見せた。父親だった。「ちゃん!」男は振り向いた「広次か、大きくなったな」「ちゃん、家に帰ろうよ」男は懐から金の包みを取り出し「これを遠州屋に返すようおまきに言ってくれ。悪いが、俺は江戸にはいられねえ。おまきにはまだ若いんだからいい人があったら一緒になるよう言ってくれ」というと父親は姿を消した。**

![Amazon | 【Amazon.co.jp限定】藤沢周平 新ドラマシリーズ「橋ものがたり」3作品セット(「小ぬか雨」+「小さな橋 で」+「吹く風は秋」)[DVD](「橋ものがたり」非売品パンフレット付き) -TVドラマ](data:image/jpeg;base64,)

**広次はヨシキリの巣を守っていた。**

**家に帰ると、おまきが見知らぬ男と酒を飲んでいた。おまきは「私も疲れたよ。この男と一緒に住もうと思ってね」。広次は「男手がいるというならおれがいる。そんな男はいらない」というと、家を飛び出した。いつの間にか4年前父親を見送った橋のたもとに来ていた。橋の向こうの音羽の町は黒っぽい薄闇の中に沈んでいる。「やっぱりここに来ていたんだね。あの男は返したから家に帰ってよ」と母親の声がした。広次はほとんど母親を許していたが、かたくなに動かなかった。すると、子供仲間のおよしの声で「広ちゃん」。「おばちゃんが家に来たの。あんたが行けば帰るかもしれないって。おばちゃん、泣いていたわよ」。およしは、両手で広次の手をにぎり「帰るよね」「うん」。家に帰ってお金を渡さなければならないが、広次はもうしばらくこのままでいたいような気がした。**

**「橋ものがたり」**

**の橋**



**藤沢周平**

**1927年（昭和2年）～ 1997年（平成9​年）**

**｛後記｝遠州屋、米屋の旦那もいい人柄だ。おまきも自分で稼いだ金の一部を主人の借金の返還に回している。父親の民蔵も悪人には思えない。およしも優しい。皆貧しいながら好人物ばかりではないか。やがておりょうも戻ってくるだろう。こちらも気持ちがほのぼのとしてきた。（小林）（イラスト藤森）**